Solo Motherhood in Denmark

デンマークのひとり母親に関する研究

Interviewee

Dr. Tine Ravn

Q. 研究のバックグラウンド、関心分野を教えてください。

デンマークのオーフス大学政治学部の Center for Research and Research Policy で助教として仕事をしている。社会学者として訓練を受けた。社会学者として、生殖補助医療、ひとり母親、ジェンダー、アイデンティティや家族について興味を持っている。

2017 年に PhD を取得し、学位論文では solo motherhood(以下、ひとり母親、またはシングルマザーと表記)(※離婚して子供を育てている、所謂シングルマザーのことではなく、一人親として子どもを産み育てることを選択した女性のこと。選択的シングルマザー)と生殖補助医療の意味について研究した。最近、このテーマに基づいて本を出版した。

それ以外に、研究における誠実さ、倫理、責任ある研究とイノベーションにも関心がある。

現在、HYBRIDA という共同研究プロジェクトに参加している。それは、オルガノイド技術の倫理面について研究するもので、欧州委員会から資金提供を受けている。

Q. 研究によって得られた主要な結果を教えてください。研究を進めるにあたって、難しい面はありましたか。

科学と社会が交わる点に着目して、現代社会と技術の変化を追っている。人々と社会、新しい技術の関係、そしてこれらが互いにどのように影響しあっているかに関心がある。医療との関わりについては、個人と生殖補助医療の社会文化的意味を明らかにしたいと考えている。

ひとり母親について、伝記的ナラティブの手法を用いたインタビューを通して、彼女たちがいかにアイデンティティや関係性を構築し、生殖補助医療との関係において個人的経験を意味あるものにしているかを明らかにした。それは、特定の社会的ナラティブを利用し、交渉し、変化させる時に生じる。これは、理解という営みにおけるミクロとマクロの関係性に関連するもの。テクノロジーがいかにして、我々が家族を作るやり方に影響しているか、私たちがいかにアイデンティティを理解し、いかに生物遺伝的側面と社会的側面の関係性に意味を付与するかを、ミクロとマクロの双方から理解するものだ。例えば、ドナーを利用して子供を持とうと決めたとき、生物遺伝学的なものをどのようにみなすのか? どのような意味を帰属させるのか? 生物遺伝学は、理由づけのためにどの程度重要なのか? どのように家族を形成するのか?

生殖補助医療に伴うパラドックスの存在にワクワクする。例えば、生殖補助医療は、生殖という自然を補助するために発展してきた。しかし、それは新しい形の家族を作るのに利用されるようになってきた。もう一つのパラドクスは、生殖補助医療は、不妊を解決するためと称して発展を遂げてきたことだが、フェミニスト研究によれば、生殖補助医療は生殖やジェンダーによる期待の社会化を強化するのに役立ってきた。このパラドクスを見るために使用したプリズムが、ひとり母親だった。

@YURI HIBINO

ひとり母親の性質を明らかにし、表層レベルを超えたところにある共通する特徴を明らかにしたいと思う。何らかのパターンがあるのかどうかを調べたい。そのために伝記的ナラティブ法を用いた。インタビュー対象者には、9 学年から順を追って自分の人生を語ってもらった。政策分析や小規模な観察研究も実施した。

その結果、主要な成果は、次のような問いから生まれた。

1) ひとり母親が、ひとりで子供を持つことを決めた動機
2) どのように家族を実践しているか、自分の決定に沿ってどのように家族を構築しているか
3) ドナーとどのように関係を作っているか(ドナーを親族 kin とみなしているか、いないか、あるいはその中間など)
4) 半きょうだいをどのようにみなしているか
5) 不妊治療のステージをどのように行ったか　(独身女性の場合、もらえる少額の助成がある)

研究の際、特に難しい問題には直面しなかった。インタビューを行った対象者はみな協力的だった。私の質問を歓迎してくれた、というのも彼女たちは社会のステレオタイプ(利己的だとか、夫を見つける時間がないとか、自分を完璧にするために子供を必要としている、などの)にある程度、嫌気がさしていたから。そして、こうした前提に疑問符をつけ、社会への啓発をしたかったから。

彼女たちは母親になる過程で大抵障害にぶつかっていた。だから、彼女たちのストーリーに公正さを付与し、自分の研究課題とバランスすることに大きな責任を覚えた。

自分の研究は、今のところデンマークではひとり母親についての唯一の博士論文だ。

Q. デンマークで精子提供はどのように行われていますか?

デンマークでは、2007 年にレズビアンと独身女性に生殖補助医療へのアクセスが認められた。

1997 年から 2007 年までの間、法律はなかったが、公的な医療保険システムの中で、レズビアンや独身女性は、生殖補助医療を利用することを禁止されていた。

一方、私立の助産クリニックでは、助産師らが人工授精を提供できるという抜け穴があった。しかし医療の中では許されていなかった。だからもしシングルやレズビアン女性が(人工授精ではなく)体外受精を利用したいと思ったとしても、それにはアクセスできなかった。つまり、2007 年までは、人工授精だけが可能だった。

2012 年、配偶子に関して、匿名か、非匿名かを依頼者が選ぶことができるシステムが導入された。

この二重性は今も継続している。2018 年から、医学的理由があれば、精子と卵子の双方の提供を受けて受精卵を作ることができるようになった。この場合、精子か卵子かどちらかは非匿名ドナーを依頼する必要がある。

Q. デンマークで精子提供をもっとも利用するのはどのような人たちですか?

マジョリティを構成するのはシングルの女性で、このトレンドは上昇している。2011 年には、1,129 人の女性が精子提供を利用した。2019 年には 1,870 人になった。これは、治療人数で、実際に子供が

@YURI HIBINO

できた数ではない。一般に、年間の出生の約 10%が生殖補助医療によるもの。そして年間の出生のほぼ 1%が独身の女性によるもの。

Q. Solo-mom の場合、精子はどこから入手しますか? どのようなことが考慮されますか?

自分の研究の場合、精子は全て精子バンクから調達されていた。それは最も一般的なアプローチといえる。

そうでなければ、Rainbow Families にコンタクトするかだ。自分は Rainbow Families について、あまり詳しくはない。デンマークの場合、シングルの女性は精子バンクを利用する傾向がある。その際、公立、または私立の医療システムを使う。(どちらを使うかは、女性の年齢による)

Q. Solo-mom にとって、精子ドナーは匿名が好まれますか? 非匿名が好まれますか?

一般に、非匿名ドナーが好まれる傾向がある。それは、社会全体の潮流に従ったもの。現在、遺伝的な繋がりを知ることは、子供にとってますます重要だと考えられるようになってきている。研究によれば、ひとり母親は、早い時期に子どもに告知する傾向があることが報告されている。国際的な精子バンクのクリオス(Cryos)では、ここ数年、オープンドナーや、詳細なプロフィールを公開しているドナーの人気が高まっているとしている。オープンドナーの精子は不足しがちなので需給は逆になっている。このことは多少の問題にはなっているものの、ドナーの方も、徐々に自分のアイデンティティが知られることに抵抗がなくなってきている。

自分の研究では、15 人の女性が、オープンドナーを選んだ。子供が大きくなったらコンタクトできるように。7 人の女性は、コンタクトできないドナーを選んだ。後者のグループの人たちは、オープンのドナーの場合、ドナーは、子供が大きくなったら父親になれるかのような誤った期待を持つのではないか、ということを、オープンドナーを選ばない理由としてあげていた。しかし、大多数の女性たちは、子供がいずれドナーにコンタクトできるということを重要だと考えていた。彼女たちは、子供は父親の家系についてもっと知りたいと興味を持つだろうと考えていて、それを決めるのは自分ではなく子供達であるべきだと主張した。

ひとり母親の女性は子供に誕生のストーリーを話すために、自分の出産がポジティブなものだということに価値を置いている。それは、子供がどうやってこの世に来たかのストーリーだから。ドナーの情報を知らせることができれば、それはこのポジティブなナラティブの一部として役立つ。

Q. 精子ドナーを利用する solo-mom の間でどのような選好がみられますか?

医療システムの中では、早い段階からドクターたちは自分と似たドナーを選ぶように女性たちにアドバイスしてきた。母親と子供の身体的特徴が似るように。調査した女性のすべてが白人で、“完璧な”ドナーを見つけるために時間と労力を費やしていた。外見が似た子供を作るということは、重要な要素の一つ。女性たちは、ドナーと価値観が似ていることも求めていた。ある意味、何らかの形で関係したいという気持ちがあるのだろう。

@YURI HIBINO

デンマークでは、ドナーを選ぶ際、選択肢がたくさんある。オープンドナーを選ぶなら、プロフィールの情報をたくさんもらえる。子供時代の話、子供の時の写真、また、ドナーが実際に話している声を聞くことすらできる場合もある。ドナーは、自分のモチベーションを手紙にしたためる。それは、親にとっては、子供が将来どのような人物に会うことになるのかの確認にもなる。もちろん、医学的に詳細な情報にもアクセスできる。

女性たちは、新しいドナーが現れたなら、しばしば迅速に選択しなければならなかった。女性たちはドナーを選びすぎて途中で疲れてくる。それで、あまり好みでない第二希望、第三志望も決めなければならない。ドナーを何度も変更しなければならないため、女性はドナーの選択に関してある程度、手段的にならざるを得ない。

Q. デンマークでシングルの女性が精子提供を利用して子どもを育てていくとき、不利益や差別はありますか?

一般に、そのような不利益はない。ある研究によれば、シングルの母親の子供達は、すくすくと育っている。だから、伝統的家族の中で育つ子供と比べて、調整しなければならない困難として特記すべきことはない。

さらに、家族の形成に関して多様性がますます認められるようになっているので、シングルの母親は、非伝統的な家族の中で育っている他の子供たちと、自分の子供が出会うことを期待できる。ひとり母親の子供たちは、他の子供たちとそれほど違っているわけではない。

女性たちは、シングルで子供を持つ女性に対して、世間にいくらかネガティブでステレオタイプな見方があることは知っている。しかし、最近はこの表現に変化が見られるようになってきた。

デンマークでは、国から不妊治療に関する統計が発表されるとき、毎回、なぜ女性はこの方法を選択できるのに男性はできないのだと疑問の声が上がるようになってきている。

全体としてシングルの女性、そして、ひいてはシングルの母親をどのようにみなすかということについて、社会におけるディスコースには変化が生じている。

もう一つのポイントは、女性たちがドナーを選ぶとき、それは父親を選んでいるのではなく、子供を選んでいる、ということだ。だからそれは偶然に委ねるのではなく、計画されたもの。血縁(kin)とは何か、ドナーやドナーきょうだいとどのように付き合うか、といった新しい検討課題に直面する。

それは倫理的な決断であるようにも見える。というのは、父親の系譜がわからない子供をこの世に生み出す選択になるから。

女性たちは、個人的なネットワークから強力なサポートを得ていると感じている。一方で、それについて議論するソーシャルメディアのスレッドはそれほどサポーティブでないと感じている。女性たちは、子供をこの世に生み出すことができるし、その子供たちをきちんと育てていると感じている。

Q. ドナーやドナーきょうだいとの交流は活発ですか?

インタビューをしたのは何年か前。だから当時に比べれば今は互いを発見する機会はもっと増えている。女性たちは、当時、意思決定をする過程で将来、半きょうだいと出会う可能性について多くのことを考えていたわけではなかった。

@YURI HIBINO

何人かの女性は、子供が生まれて初めてそのことを考えるようになった。相手の Facebook のページなどを見た女性もいたが、その多くが、子供はまだ小さく、半きょうだいを見つけて今すぐに連絡をとるのは適切ではないと思った。

彼女たちは、半きょうだいの存在には興味を持っていて、子供が成長したら、この可能性にアクセスすることことができると考えている。これらの「半きょうだい」は既存の親族システムに合致しないため、どのような人間関係が作られるかを想像することは難しい。 彼女たちはそれに正当性を付与するための語彙を持っていない。

最初にインタビューをした何人かの女性は、その後、半きょうだいとの関係をつくった。 ある研究によると、シングル女性は、子供を育てるにあたって、父親の存在がないため、新しい家族ネットワークをより受け入れる傾向がある。

Q. Solo-mom の場合、精子ドナーとどのように境界を作りますか?

レズビアン家族について、自分は調査をしていないが、文献を読むと、レズビアンの女性たちは、オープンドナーを好まないようだ。それに対して、ひとり母親の女性は、パートナーがいないため、ドナーに対してレズビアンカップルとは異なった重要性を付与しているようだ。

シングルの母親がドナーをどう思っているのか、興味深い問いはたくさんある。

例えば、ドナーは親族(kin)なのか、親族ではないのか? ドナーのアイデンティティがオープンになっていく動向はこのことにどう影響するか? そこには、緊張関係がある。子供とドナーは、遺伝的につながっている。しかし、もし匿名なら、実際に会う可能性はない。このような関係は、既存の親族システムの中に明確な位置がない。この関係を表す言葉がない。

インタビューしたシングルの母親たちは、この親族関係をマネジメントすることに骨を折っていた。配偶子提供は、最後の手段だと考えられている。そして、より個人的な結びつきを作ると考えられている(遺伝的父親は、子供がこの世に生み出された物語の一部となる)。親族(kin)と非親族(non-kin)の境界を分けるのは難しい。

このことについて明確なパターンは存在しない。パターンはむしろプロセスを考えている最初の段階や、ドナーを選んでいる段階でより顕著だ。

ドナーの意味についての問いは、子供が成長して、父親について聞いてくるようになる時に新しい段階に入る。

Q. Solo-mom にとって、自分で産むことや、遺伝的つながりにどの程度こだわりがありますか?

シングルの母親たちは、自分と遺伝的にも生物学的にもつながった子供が欲しくてたまらないと感じている。子供を自分で産むことができるし、妊娠を経験したいと思っている。

ケンブリッジ大学の Suzanne Graham 教授と共同で、英国とデンマークのひとり母親に関する比較研究を行なった。両国のマインドセットは異なっていた。例えは、英国では養子は、「究極の道徳的決断」であり、デンマークではそうではなかった。デンマークでは国際養子についてかなり批判的な見方があり、それが意思決定に影響を与えている。デンマークのシングル女性が養子をとるのはかなり難しい。シングルの女性に紹介される子

@YURI HIBINO

供たちは、障害があるケースもあり、シングルの親にとっては、大きな困難となる。インタビューしたほとんどの女性たちは、決して養子をしないとは言わなかったが、それよりは明らかに精子提供を受けることを選好していた。

これにより、前向きなストーリーが可能になる。これは「偶然ではなく、計画された選択」だと言える。それに対して、妊娠するために一晩の情事を持つことは望ましいとは考えられていない。女性たちは、妊娠するまでのストーリーが、ポジティブで道徳的なものであることを望んでいた。

Q.また今後の研究の展望について教えてください。

現在のところ、ひとり母親についての研究を継続することは考えていない。他にやるべき研究があるので。今後、ネットワークを広げて日本とも国際共同研究を行う計画がある(リーダーは Dr.Stine Willum Adrian)。自分にとっては興味深い機会になると思っている。

(2021 年 10 月)

Tine Ravn Link

デンマークのオーフス大学政治学部の Center for Research and Research Policy で助教として仕事をしている。社会学者研究領域は、生殖補助医療の社会的、法的および倫理的側面、知識社会学、家族社会学など。
精子提供で子をもったシングルの女性についてインタビューを実施し、論文及び書籍を出版した。

著書
・Tine Ravn 2021 Lived Realities of Solo Motherhood, Donor Conception and Medically Assisted Reproduction. Emerald Publishing Limited Link

論文
・Tine Ravn 2017 Strategies for life: Lived realities of solo motherhood, kinship and medically assisted reproduction. PhD dissertation Link

@YURI HIBINO